

一八八六年四月二十一日(水)

ナレンドラと神の實在——バヴァナート、プールナ、スレンドラ

タクール、聖ラーマクリシュナとお目にかかつてからヒーラナンダは馬車に乗った。馬車のそばにはナレンドラとラカールが立っていて、三人は楽しそうにしゃべっている。時間は十時。ヒーラナンダはまた明日、来るだろう。彼についてのことは、一八八六年四月二十二日の記述にくわしく書いてある。

今日は水曜日。ボイシャク月九日、チョイトロ黒分三日目。一八八六年四月二十一日。ナレンドラは庭の小道をぶらつきながら校長と話している。彼の家では、母親と弟たちが大そう困窮していた。まだ先の見通しもついていない。彼は非常に悩んでいた。

ナレンドラ「ヴィディヤサーガルの学校の仕事は、もう私には必要ありません。ガヤーに行こうと思っっているのです。ある地主のところの支配人の口があるのですが……。全く、神もヘチマもないですよね」

モニ「ははははは。今はそんなこと言っていますが、後になるとちがってきますよ。懐疑論(Scepticism)は、神をさとする道での一つのステージですからね——さまざまなステージを通り越して先へ先へと進

んでいけば、やがて至聖カミに達する——大覚者バラムンサツジツ様はそう言っておられます」（訳註、モニ——マヘンドラ・グプタが使った仮名の一つ）

ナレンドラ「この樹を見ているように、神を見る人が誰かいるでしょうかねえ？」

モニ「タクールは見ておられますよ」

ナレンドラ「錯覚っていうこともあるでしょう」

モニ「どんな心境で見たにしても、その状態におけるその人にとってはリアリティであり、真実です。たとえば夢で公園に行った——少なくとも夢を見ているあいだは、君にとってその公園はリアリティです。しかし境地が変われば——つまり目覚めた状態になると、あれは心の迷いだった、などと感じる！ 神を見得る境地——その境地になれば、見神ということはリアリティ（真実）と感ずるようになりますよ」

ナレンドラ「僕の必要としているのはトゥールース（真理）なんです。先日、大覚者バラムンサツジツと大議論をしました」  
モニ「笑いながら」ホウ、どんなことになりましたか？」

ナレンドラ「あの方が、『わたしのことを神様だなんて言う人たちがいるよ』とおっしゃるから、僕はこう言いました——『千人がそう言っても、僕は自分でたしかに真実だと確信するまでは、そんなこと申しませんよ』」

あの方は——『何でも、大勢の人が言うことはホントだよ。それが正義ダルマだよ』とおっしゃる。

僕は、自分で正しいという確信が持てなければ、他人の言うことなんぞに左右されません」

モニ「ハッハッハ……。君の態度はコペルニクス(Copernicus)やバークリー(Berkeley)と同じだね。世界中の人が、太陽は動くと言っていたが、コペルニクスはきかなかつた。——世界中の人が、外界(External World)——目で見聞きするこの世界——は存在すると言っているのに、バークリーは承知しなかつた。だから、ルイス(Lewis)はこう言ったのです——バークリーはまさに、哲学界のコペルニクスだ、と(Why was not Berkeley a philosophical Copernicus?)」

ナレンドラ「哲学史(History of philosophy)を一冊、下さいませんか?」

校長「誰の? ルイス(Lewis)の?」

ナレンドラ「いいえ、ユーベルヴェーク(Ueberweg)。ドイツ(German)のものも読まなければ——」

モニ「君は、目の前にある樹のような具合に神を見る人があるか?と言いましたね? じゃ、神が人間の姿をとって君の目の前にきて、私は神だ!と言ったとしたら、君は信じますか? 君、ラザロの話を知っていますか? ラザロがあの世界に行つて、アブラハムに、『私は親類や友人たちに報告してきます。あの世や地獄というものが、ちゃんと存在するということを——』と言つたら、アブラハムはこう答えた。『お前が戻つて話したとしても、あの連中が信じると思うかね、そのことを? みんなはきつとこう言うよ——どこかのイカサマ師がつまらんことを言っている』と。(ルカによる福音書 16章19〜31節)

タクルルはおつしやいましたよ——『神は頭で考えたつてわかるものではない。信によつてのみ——真実の智識も覚智も、見神も交神も、すべては成就する』と」

バヴァナートは結婚していた。生活費を稼がなければならぬ。彼は校長のところに来てこう言っ  
て頼んだ——「ヴィディヤサーガルが新しく学校をつくと聞きましたが……。私も生活費を稼がな  
ければいけないので、学校に何か仕事はありませんか？」

「ラームラル——プールの馬車賃——スレンドラのすだれ」

午後三時—四時。タクールはベッドに横になっていらつしやる。ラームラルさんがお足をさすつて  
いる。そのほか、部屋にはシンティのゴパール(後のスワミ・アドヴァイターナダ)とモニがいる。ラー  
ムラルは今日、南神村ドフキネンヨルからタクールのお見舞いに来たのである。

タクールはモニに、窓をしめて、それから足をさするようにとおつしやる。

タクールのご希望で、プールの貸馬車に乗ってコシポールにお会いしにやつてきた。馬車賃はモ  
ニが支払うのである。タクールはゴパールに手まねでおききになった——「この方(校長)からお金を  
いただいたかい？」

ゴパール「はい、頂戴しました」

夜九時。スレンドラとラームたちがカルカッタへ帰る準備をはじめた。

ボイシヤク月の日射し——日中はタクールの部屋もひどく暑くなる。それでスレンドラが日よけの  
すだれを持ってきてくれた。カーテンのようにして窓にぶら下げたら、部屋はきつと涼しくなるだろ  
う。

スレンドラ「どうして今まで、誰も窓にすだれをかけなかったんだらうね？——まったく、誰も気が付かないんだからね」

信者の一人「はっはっはっは。みなさんは只今、ブラフマン智の境地なんですよ。ソレは我なり（ソーハム）——世界は虚仮。今に、も少し下がって、あなたは主人、私は召使い——という気分になったら、いろんなことに気がついてサービスがよくなるでしょう！」（一同笑う）